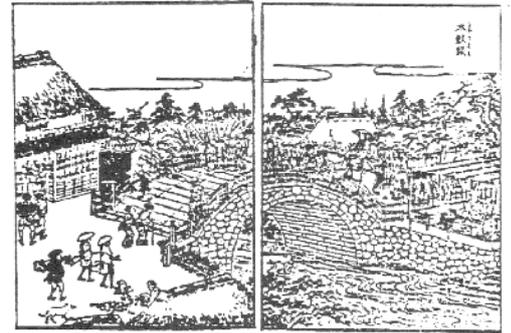


目黒区 野鳥のすめるまちづくり計画(抄)

アメニティタウン計画

昭和 61 年 3 月

アメニティ・タウンのイメージはこんなまちです。やすらぎのあるまち。美しさのあるまち。やさしさのあるまち。たのしさのあるまち。親しみのあるまち。懐しさのあるまち。ドラマ性のあるまち……。場所場所で、同じようなものではありません。“顔”を持つまち、個性のあるまちがアメニティ・タウンのイメージでもあります。そしてその姿はまた「くらしてよかったと思えるまち」「住んでいて誇りに思えるまち」ともいえるでしょう。



江戸時代の目黒区

大切にしたい 5 つの視点

- 風景を大切にする** まちの風景(景観)を、「まちにすむ人々の共有の財産」と考え、まちの身だしなみをととのえていきます。
- かくされた価値を大切にする** 歴史的、文化的なものを守り、長年つちかわれてきたその土地ならではのものを大切にします。
- ふれ合うことを大切にする** まちづくりの主役はそこに住む人々です。人とまちとの出会い、人と人とのふれあいを大切にして、愛されるまちをめざします。
- こまやかな愛情を大切にする** アメニティ・タウンはみんなのもの。お年よりや子ども、体の不自由な方へのこまやかな配慮を大切にします。
- ディスアメニティにも目を向ける** 水質や大気汚染、まちの騒音など、環境を悪くする要因(ディスアメニティ)の解消の努力を大切にします。

計画のテーマ **「自然と共存するまち」**基本理念 **野鳥を自然のシンボルとした「鳥たちのうたがきこえるまち」**

野鳥は、植物や小動物が、土や水とかかわりながら、互いに役割りをもち、助け合いながら共存する自然のしくみ(生態系)のなかで生活しています。その生息環境の条件は、一個の生物としての私たち人間にとっても、やすらぎのある快適な環境にほかなりません。

「鳥たちのうたがきこえるまち」は、まちのなかに“自然のしくみ”が維持され、また心豊かな人々が自然やいのちをいつくしむ人間社会を築くなかで実現します。

3つの目標 **I.野鳥のすめる環境をつくる**

個人の庭、公共施設などのみどりや水辺の保全・創出と質の向上を図る。

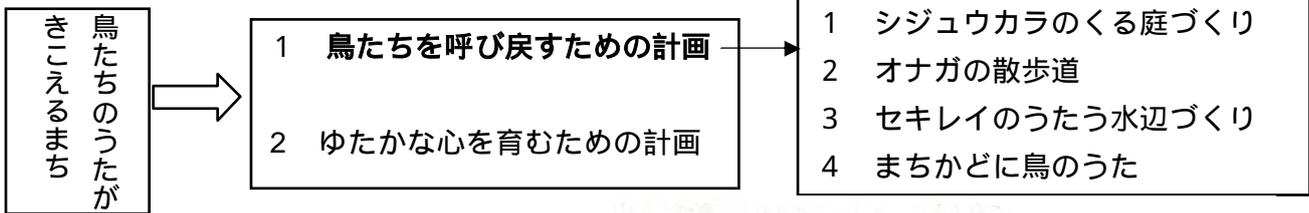
自然とのふれあいの場をつくる

自然とのふれあいが身近な場所で行えることにより、自然やまちづくりへの興味を高める。

まちをいつくしむ人間性を育てる

さまざまな活動を通じて、人々のコミュニケーションの向上を図り、まちづくりへの参加意識を高める。

鳥たちを呼び戻すための計画



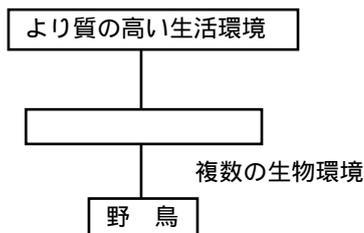
この計画では、上の図のようにいずれも鳥をテーマにした4つの具体的プランから構成されている。これは、目黒区のような高密度に市街化の進んだ都市にも野鳥と共存できるような身近な自然を保全・創出し、その努力の過程を大切にしながら、まちづくりを区民自らが考えるきっかけをつくらうという意向からである。

区民みんなに理解され、愛されるまちの創造は、野鳥への配慮をもつことによって従来のまちづくりを見直すことからその第一歩がはじまる。

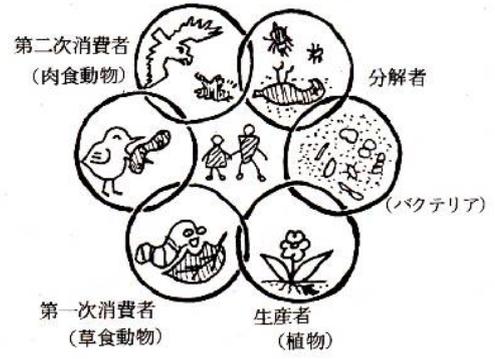
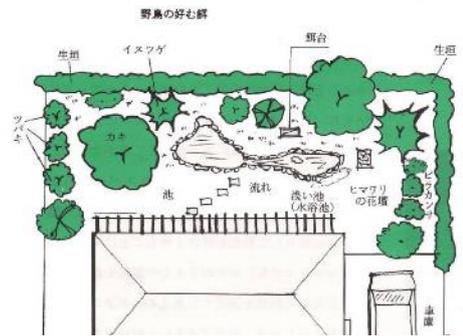
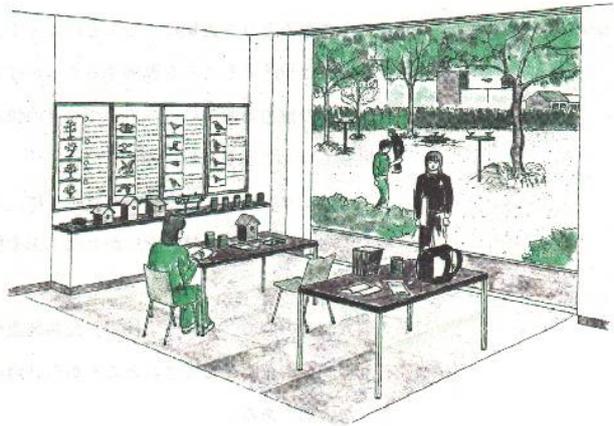


鳥への配慮は、まちに花が咲き乱れ、実のたわわな生垣の木々が生い茂り、心やさしい人びとの心のふれあいが生まれる「住んでいてよかったまち、住みたくなるまち」を約束してくれる“より質の高い総合的生活環境の向上”の実現手段の一つともいえる。

この計画は、いずれも「野鳥の生息調査（昭和60年4月～昭和61年3月）」の調査結果にもとづいて、目黒区をアメニティの1つの視点から見なおし、計画したものである。



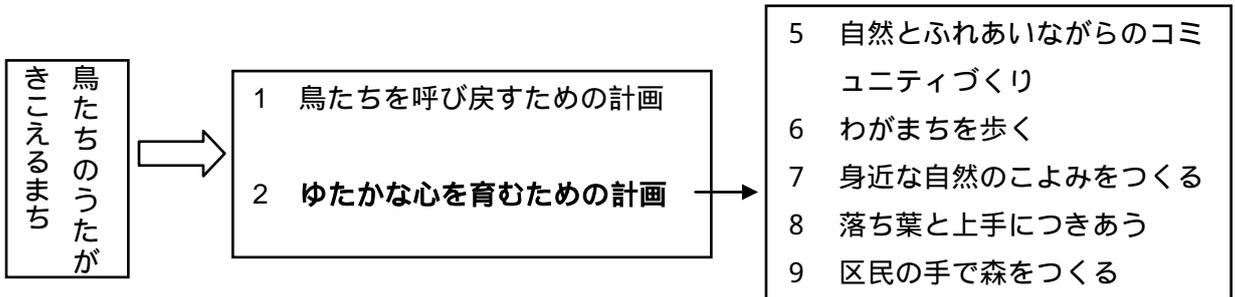
「鳥たちを呼び戻すための計画」が目ざす、アメニティの高い都市のイメージ



生態系の中での生物のつながり（食物連鎖）



街を見る知る耕す ゆたかな心を育む計画



愛されるまち、住んでいてよかったと感じるまち、誇りに思えるまち、そんなまちづくりをめざしていくためには、施設などを整備野鳥などの自然を身近に呼ぶ工夫をするとともに、人々の心が育まれていくことも必要である。

まちづくりは、施設を整備すればよいというものではない。まちをつくる住民の参加があってはじめて真のまちづくりが実現できる。まちにはいろいろな人のくらしがあり、昔からつちかわれてきた文化や歴史があり、大地に根を張り生きている自然がある。野鳥のすめるまちづくりはこうしたまちにある人々のくらしやいとなみ、自然などを、ひとりひとりがまちを見て、まちを歩いてまちを知ることではじめて実現できるものである。



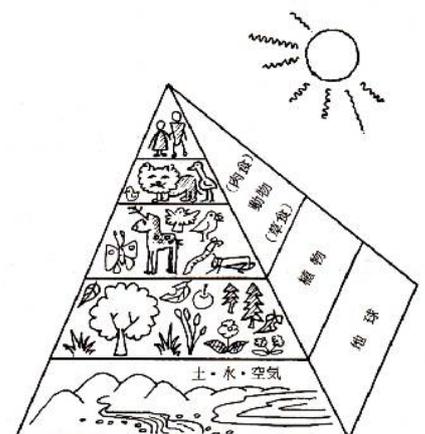
●まちの各所に解説板を
(サイン計画)

街を見る・知る・耕す* ゆたかな心を育む計画 では、区民が楽しみながら「ヒト」や「モノ」や「コト」からなるまちとかかわり合い、ふれあうことにより、自分達のまちにある人々のいとなみや自然など、また、古いたてものや年輪を刻みこんだ大木などに感じる味わい、ひとびとのくらしや文化など目に見えない奥行きなどを見出し、さらにこれらを自分達の手により守り育て、みんなでまちをつくる、そういうまちづくりをねらいとして、ゆたかな環境づくりとあわせて、野鳥のすめるまちづくりの実現をめざすものである。

* “耕す” は文化 (Culture) の語源



全区内に計画されている「みどりの散歩道」の案内板や道路のイメージ板



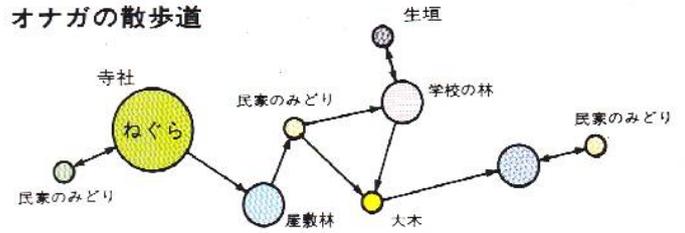
M・O・スチーン博士による「生命のピラミッド」



目黒区では市街化が進んで、まとまった大きなみどりは、社寺、古くからの屋敷、大学・研究所構内、斜面地など限られた場所となっています。それらの緑地は都市にすむ鳥にとって、“みどりの島”として生活の拠点になっており、私たちにとっても、やすらぎあるまちの風景を構成するいわばまちの骨格といえる大切な緑の空間です。また社寺でのお祭りなど伝統的な行事とも結びついて、“みどりの島”は地域の人々に親しまれているものが数多くあります。

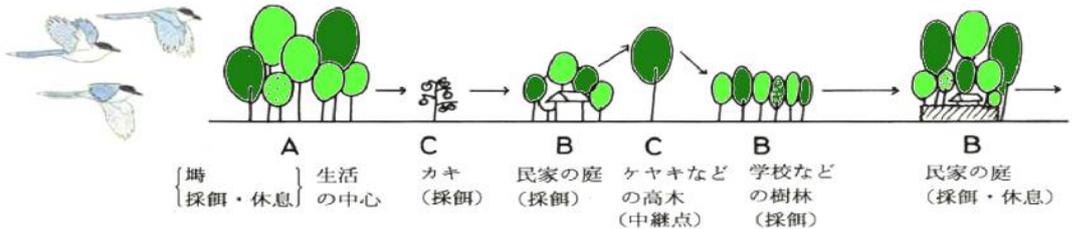
オナガの散歩道 みどりの島を保全する計画では、これらまとまりのあるみどりの保全を図り、これを拠点として小さなみどりをつなげていく、みどりのネットワーク化を実現していこうというものです。

オナガの散歩道



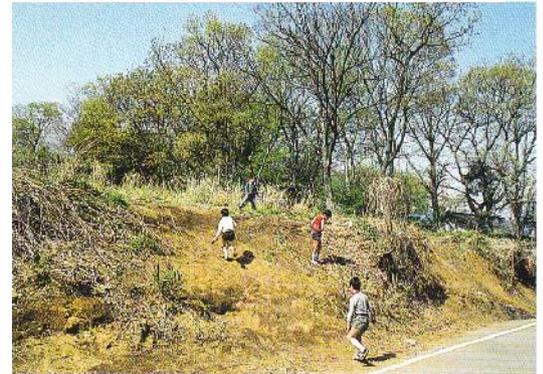
オナガ群の緑地利用パターン
(1日の周回コース：みどりと野鳥の実態調査より)

- 保存樹・保存樹林の指定をすすめる。
- まとまりのある

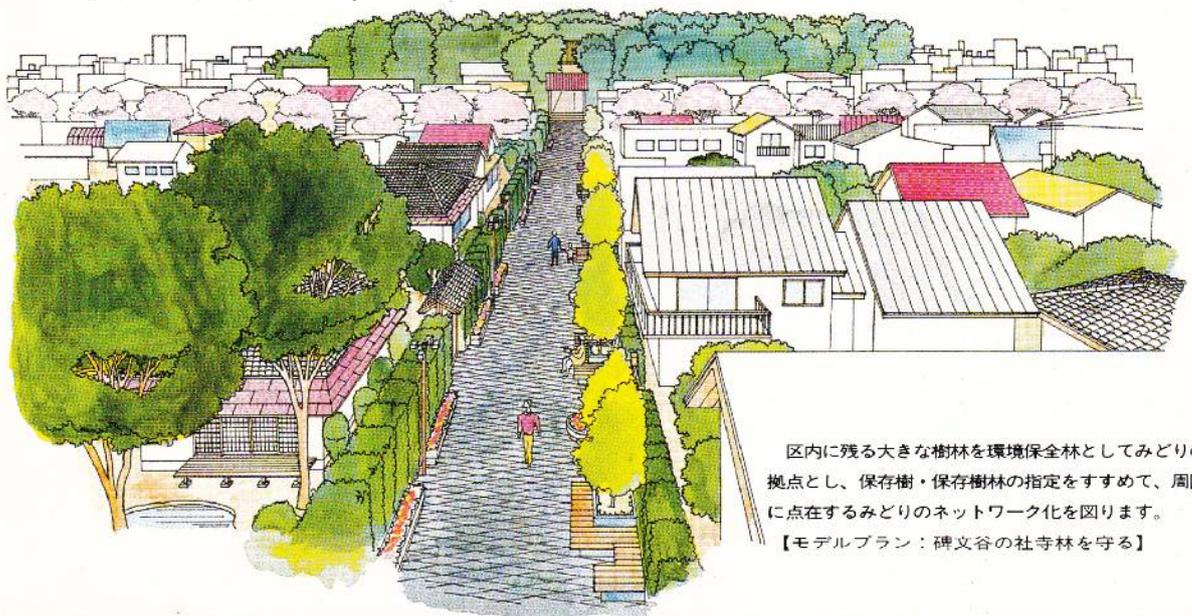


るみどり(環境保全林)を守り、それを拠点としたみどりのネットワーク化をはかる。

- ブロック塀などの生垣化をすすめる。
- 地域の特徴をいかし、花木や実のなる木を植える。
- みどりの景観を大切にする。
- 学校に地域のシンボルとなる木を植え、林をつくる。
- 緑道、街路樹などみどりの線をのばし、つなげる。
- 苗木を配布し、小さな点のみどりをふやす。
- 環境優良地域を保全する。



子どもたちにとってもかけがえのないみどりの島を保全します。



区内に残る大きな樹林を環境保全林としてみどりの拠点とし、保存樹・保存樹林の指定をすすめて、周囲に点在するみどりのネットワーク化を図ります。
【モデルプラン：碑文谷の社寺林を守る】



坂の多い地形からもわかるように、目黒区には多くのわきみずや川がありますが、下水道の整備とともに今では目黒川以外のほとんどの川が埋め立てられて、緑道などとして利用されています。こうしたところに、人々が水と親しみ水辺にすむ鳥たちがくるような流れをつくり、また池や目黒川では、集まってくる鳥たちと人がふれあう場を積極的につくって、うるおいのあるまちをめざします。



ふたがけされた中小河川の上部も水と親しめる場として整備をはかります。

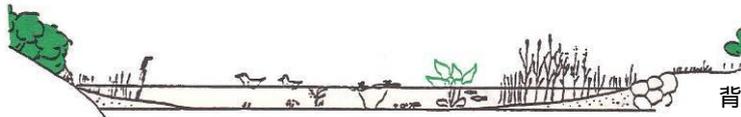
【モデルプラン：セキレイのうたう香川緑道】

セキレイのうたう水辺づくり 水辺環境の蘇生計画では、水を私たち人間とまちに住む動物や植物の貴重な宝物として、その保全、創出を図ります。

- 目黒川や清水池公園の池などの水をきれいにする。
- わきみずを大切にする。
- 庭に鳥の水あびのできる小さな池やつくばいなどをつくる。
- 舗装を雨水がしみこむ透水性のものにする。
- 緑道などにせせらぎをつくる。



わきみずの活用を図ります。



背丈の高い植物を導入し、鳥だまりをつくる



都市に残る水辺を大切に、人が水と親しむことのできる場所をつくりたい。目黒川の船入場では、東京湾からやってくるユリカモメとのふれあいの場をつくりたい。

【モデルプラン：都鳥の舞う目黒川】



ビルや住宅の立ち並ぶ密集市街地や、商店街などは、人々のいこいやうるおい感が特に必要な場所です。そのためには、限られたスペースを有効に活用し、まちなみをつくらせている個々の家や店がお互いに協力し合うことが大切です。

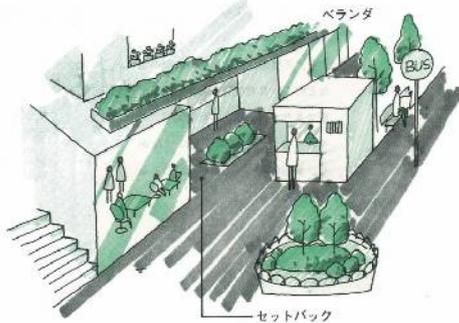
まちかどに鳥のうた うるおいのあるまちなみづくり計画は、花やみどりの創出を工夫し、たてものやまちの施設等の色彩やデザインを考え、また要所にはまちかど公園や広場の整備を図りながら、うるおいのあるまちをめざすものです。

- 小さなスペースにも木や花を植える。
- 看板等の色・形・位置などのルールをつくる。
- ビルの屋上やまちかどに四季の色どりを工夫する。
- まちかどに文化的雰囲気を感じさせるものを置く。
- 歩車共存道路一人と車が共存できるようなやさぎのある道をつくる。
- 環七などの騒音対策をすすめる。



うるおいのある商店街の形成をめざします

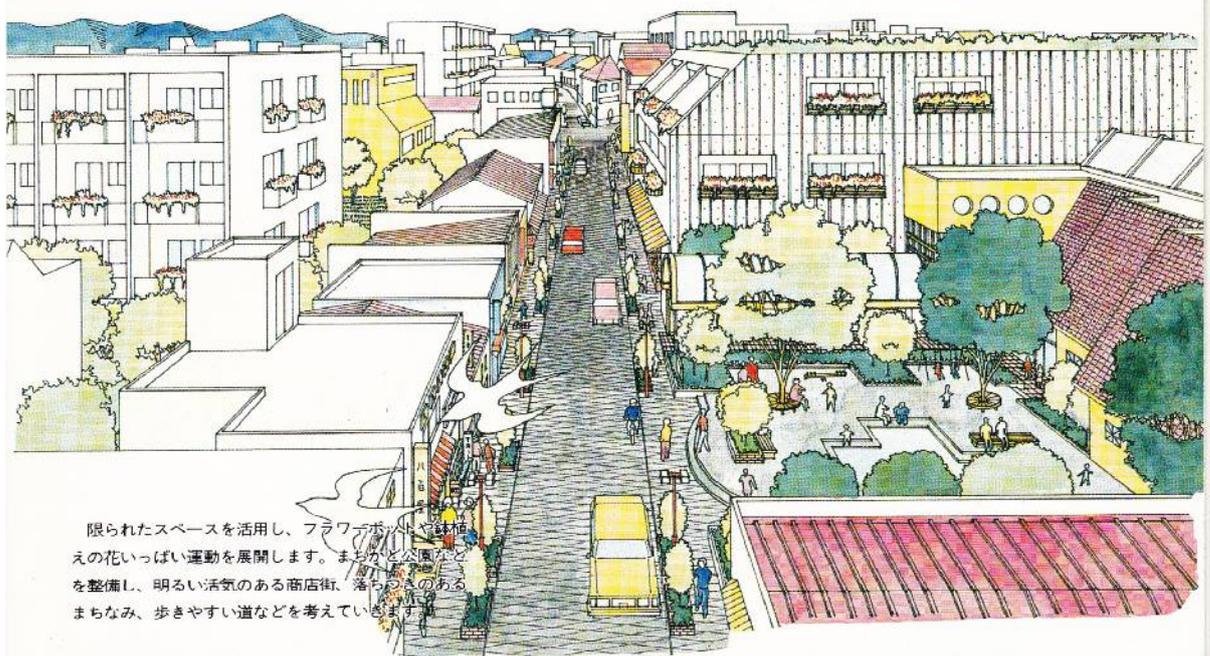
限られたスペースを活用し、フラワーポットや鉢植えの花いっぱい運動を展開します。まちかど公園などを整備し、明るい活気のある商店街、落ちつきのあるまちなみ、歩きやすい道などを考えていきます。



まちかどにみどりや花をみやす。



ベランダの壁緑化をすすめます

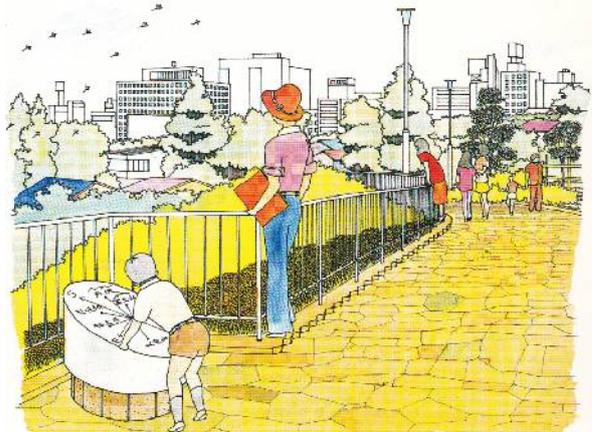


限られたスペースを活用し、フラワーポットや鉢植えの花いっぱい運動を展開します。まちかど公園などを整備し、明るい活気のある商店街、落ちつきのあるまちなみ、歩きやすい道などを考えていきます。



愛される街づくりを目指していくうえでは、施設の整備のほかに人々の心を育むことも必要です。すんでいる人たちの心が通じ合い、参加や協力があって、はじめてすみ心地のよい快適なまちが生まれるでしょう。そのためには、まず私たちが身近なところからまちを見て、知ることです。まちにはいろいろな人のくらしがあり、昔からつちかわれてきた文化や歴史があり、そして大地に根を張り生きている自然があるはずです。

街を見る知る耕す ゆたかな心を育む計画では、区民がまちを見、自然や人とふれあうなかから、協力してまちづくりをしていくゆたかな心が育まれることをめざしています。“耕す”は、文化(Culture)の語源です。



まちを望める眺望点を大切に、方位盤等を置きます。(西郷山公園)

わがまちを歩く

めぐろにはよく知られたところのほかにも身近なまちなかにいろいろな歴史的な遺産・文化財が数多くあります。この計画はこれらの由緒あるものと、公園や緑地などを結んだ散歩道を設定して、人とまちとのふれあいをすすめていくものです。

- みどりの散歩道を整備する。
- めぐろ秀景を選定する。
- 「まちのガイド」や「めぐろ昔ばなし」を発行する。
- 特色ある道路に名称をつける。
- 古木・街路樹などに歴史を語りかけるような工夫をする。
- 郷土展を開催する。



落葉はともでも腐葉土などにもなるものです。葉の恩恵を協力で

散歩道の案内には、自然や歴史を知るサインを置きます。(別所城)

落ち葉と上手につき合う



市街地のなかでは、大本や街路樹の落葉はともすると邪魔物扱いされてしまいます。「土壌」を作ったり、「昆虫のすみか」になったり、「肥料」として木の養分になったりするものです。夏のあいだ木影をつくってくれた木の葉の恩恵を思い出して、落葉を見直し地域の人が協力して木を守る意識づくりをはかります。

- 落葉のリサイクル 腐葉土づくりをすすめる。
- 落葉を利用してカブトムシやカナブンを飼育する。
- 落葉たきを行う。



広大な敷地が緑地



自然とふれあいながらのコミュニティづくり

身近な場所での自然とのふれ合いの機会をつくり、地域のコミュニティの形成をねらいます。また自分たちの手で自然を保全する作業に加わり、協力してまちのみどりを守っていく意識づくりをはかります。

- 自然観察会・親子自然教室の実施
- グリーンクラブ・自然クラブの輪を広げる。
- みどりのボランティアグループを育成する。
- 水質や、自然の移りかわり等の監視(モニタリング活動を行う)

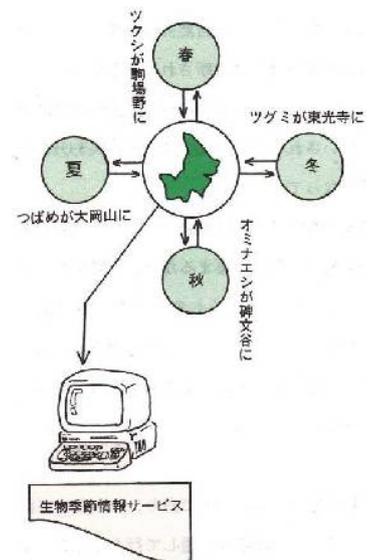


○区民からの情報を区役所が集めます。
○区役所が区民に必要な情報を提供します。

身近な自然のこよみをつくる

年々変化を続けるまちの自然を観察・記録することによって、四季の移りかわりを楽しむとともに自然を守っていく上での貴重な資料ができます。このこよみづくりは、区民ひとりひとりが調査員となって身近な自然に目を向け、記録をしていくためのシステムの提案です。みどりの保全と育成をまちづくりに活かしていくためには、総合的なみどりの計画が必要です。

- 住民参加による自然情報収集のシステム化をはかる。
- 自然の記録年報を作成する。
- まちの小さな自然展を開催する。

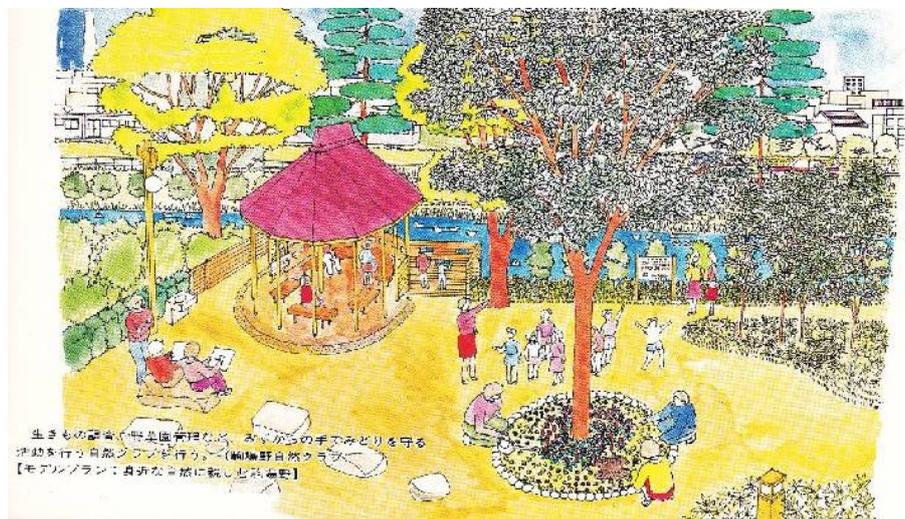


区民の手で森をつくる

みどりの保全と育成をまちづくりに活かしていくためには、総合的なみどりの計画が必要です。「区民の手で森をつくる」では、都市の森をみどりの象徴として、各地域の特性を解析し、みどりを増やすさまざまな手法をとりいれた基本構想をつくって、みどりゆたかなめぐるをめざします。

- みどりの基本構想を策定する。
- みどりの基金づくり
- 記念植樹をすすめる
- 花とみどりの地域宣言をする。

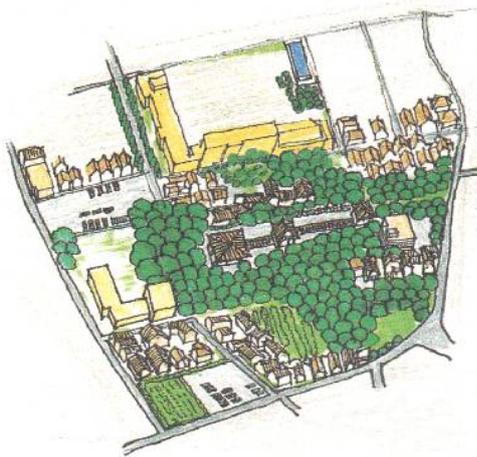
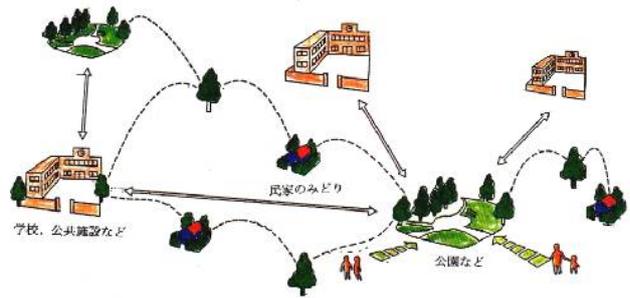
生きもの調査、野草園管理など、みずからの手でみどりを守る活動を行う自然クラブを行う。
(駒場野自然クラブ)





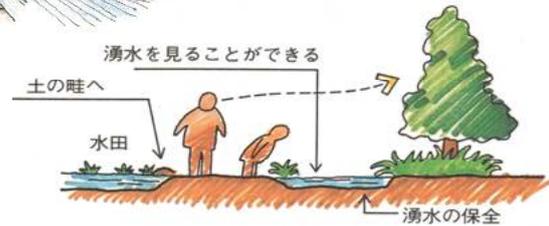
モデルプラン

- 都鳥の舞う目黒川
- 身近な自然に親しむ駒場野
- シジュウカラの遊ぶ中央部
- 鳥たちの休息地碑文谷の社寺林
- セキレイのうたう呑川緑道



◇ミニサンタチャアリー公園の位置づけと周辺のみどり。

公共施設との関係



提言にあたって

東京という巨大な都市の環境のなかで、目黒区は文化の伝統と科学の進歩を調和させつつ“まちづくり”をつづけている。しかし、世界にも珍しい発展をつづける大都会東京のなかで“まちづくり”にも新しい目標が要求される。ここに提案する“アメニティ・タウン計画”とは、21世紀に向けてのまちづくり指標の一つである。

一口でいえば“快適なまちの条件”であるアメニティも、そのまちの歴史や環境によっては必ずしも均一ではない。

ここにわれわれが、区長の要請に答えて提案しようとするのは、目黒区のアメニティの一つの課題として“野鳥のすめるまち”を内容としている。目黒区が快適な生活の条件として野鳥を選ぶことの出来るのは幸せである。

野鳥には大空を飛ぶ自由がある。その野鳥と共に住めるような環境づくりは東京人にとって、最大の幸せといわなければならない。

この提案は野鳥に好ましい環境を生み出すとともに、その努力の過程によって、これまでの目黒区のまちづくりとはちがった視点での見直しを示唆している。それは“人間尊重”という独善ではなく、人間と生物とが共存するという21世紀社会の“ロマン”を秘めている。

子供は生物、とくに動物に親しみをもつ。それは、動物の行動に、自分と同じような自然の動きが見られるからである。

巨大都市東京の一部である目黒区で人間と野鳥が共存できることは、21世紀を担う子供にとって、最大の贈り物である。

提言の内容は多岐にわたっているが、要は、これまでのまちづくりの成果を改めて“野鳥のすめる環境とは”という視点で、行政施策の各方面にわたって再検討することにもなる。

野鳥が目黒区内にその巣を求めると、区民が目黒の環境こそが、わがふる里であると呼べるようなまちづくりへの期待がこの提言に含まれている。

区民に代って区政がこの提案を生かし、その実現に向かって努力されることを心から期待する。



アメニティタウン計画策定協議会委員を代表して

磯村 英一